連載・イタリア「第二のルネッサンス」の現場訪問記④／最終回

すべての人間が自己表現できる社会

●ノンフィクション作家　今崎暁巳

楽しく、気持ちよく、豊かに暮らせる社会

◇――一人ひとりが主人公の時代

私たちは、二〇世紀末の"生活の豊かさ"を明らかにする視点から、磯村氏や経済学者もいう"イタリアの時代"がなんであり、"第二のルネッサンス"が市民と生活・文化のかかわりにおいてどんな状況をさすのか、その進行中の現実を切りとってみることをしてきた。

政治・経済・社会・文化それぞれの角度から総合的な意味づけが必要だが、市民生活にすでに形をなしはじめている文化状況の変化、あるいは、地球上で住民による生活づくりネットワークが最も進んでいるといわれるエミリヤロマーニャ州における自治状況から、一つだけいえることがある。つまり、現在進行形のイタリアの変化は、"ルネッサンス"と呼称がつけられるとおり、中世から近代への変化がそうであったように、上からでなく、人間と人間が連帯しあって進める生活・文化の変革運動であるということ。そして、"第二のルネッサンス"の"第二"の意味は、"第一"がレオナルド・ダ・ビンチ、ミケランジェロなどが代表する"優れた才能"による人間表現だったとすると、いま進行中のルネッサンスでは、すべての市民一人ひとりが自己表現することを指しているといえるのではないか。

人間一人ひとりが、文字どおり下男下女のいない"主人"公（この言葉が死語になる）になる時代の到来――まだ階級もあり、貧富も存在するイタリア資本主義社会のなかで、生活・文化の側面で一足先に、ほとんど民主主義の完成、人間自己実現の世界が、民主化の進んだ地域から、国でなく自治のなかから生まれ育ちつつあるということ。

言葉をかえていうならば、すべての人間が自己を自らの意志で拘束されることなく表現し、人とふれあい、楽しみ、何ものかを創りだすことの可能な暮らしが実現できる時代に、入りつつあるということになる。そこで、私たち日本人が自らの人間的自由度を考え、自らの今日的課題を明らかにするうえで、見逃がすことのできない点であることを指摘する必要がある。

それは、ルネッサンス――天賦人権――自由・平等・連帯の根づく社会実現へと、この五〇〇年ほど一歩一歩、限りなくすべての人間が文字どおり自由で豊かな暮らしを創り育ててきた成果が、いまとりわけ鮮明に形をなしはじめているイタリア社会と、人権と自由の根づく歴史が、残念ながら四三年しかない日本社会との、人間の心と身体を大切にする度合いの違いといえばいいのだろうか。新たな経済的貧富の較差の広がりとともに、人間的不自由が広がり、人間的に成長・発達することが不可能になるという、かつて人類史上経験したことのない精神的貧困、人間性退化の現象が、いま日本社会には深く広く進行している事実を、イタリアにおける人間解放の暮らしの確かな前進と比較して、指摘せざるをえないのだ。

それはロザンナが、日本の生活は国家財政が豊かでも、庶民の暮らしはずっとイタリアの暮らしより貧しいと証言したことの、"人間成長発達――楽しい人生づくり"の角度からの表現といえるように思う。わかりやすくいえば、楽しく、気持よく、豊かに暮らせる社会であるかどうかの問題点の指摘といえばいい。

◇――なぜ子どもが自殺するのか

私が、二度目にボローニャを訪ね、サベンナ地区の児童図書担当の市職員バロッタさん（三八歳）に再会し、教育担当の女性地区評議員の方、保育園長の方三人から、子どもの状況をうかがった時のことを語ろう。

私は、逆に日本の子どもたちの状況を聞かれて、とっさに日本を発つ前に、東京湾岸再開発による巨大団地・横浜並木団地の一一階屋上から、"マー先（先生のこと）のバカ、O君昇天"と、最後まで"おどけ"の遺言を残し飛び降り自殺をした一一歳の治君のことを語った。前後三日間、小・中学生の受験やテストを気にした自殺があいつぎ、もう新聞にも小さくしか載らなくなったことを話した。その時、三人の女性たちは真剣に、四、五分語りあった。軍司さんに訳してもらうと、こんな表現が私の胸につきささった。

「もし、同じことがイタリアで起こったら、新聞の号外がでるでしょう」

その意味するところを考えて、愕然となった。新聞の号外が出るということは、つまり子どもたちのテストや成績を気にした自殺行為を、イタリアでは天災・革命・戦争など、日常には起こらない出来事としてみているということなのだ。もちろん、ルナールの『にんじん』など、家族の人間関係などを気にする"死"への誘いは、いつの時代でも、ヨーロッパの子どものなかにもあるのだが、テストや偏差値など、学校や人生に絶望して小・中学生が自殺するなどということは、絶対にありえないといっているのだ。

別の機会に、フィレンツェの生協リーダー・貴族出身のカンパイーニ会長に同じことを語った時は、こんな言葉が返ってきた。

「イタリアは階級社会ですから、まだ貧富が存在し、貧しければ子どもたちは盗みます。親と衝突すれば家出をします。世の中が面白くなければ麻薬ものみます。しかし、一〇歳や一五歳の子どもたち、まだ親とも友だちとも、ほんの少ししか暮らしていない、恋の歓びも知らない子どもたちが、どうして自分の命を捨てるようなことをするでしょう？　考えられないことです。」

カンパイーニさんは、同じように高度成長期を経て、情報化社会へむかいつつある資本主義国に生きる人間として、日本の現実から学びたいのです、と謙虚につけ加えた。

私は、謙虚にいわれればいわれるほど、胸が苦しくなるのをどうすることもできなかった。なんといわれようと、劇場や人民の家でみたイタリアの子どもたちの明るく陽気な眼の輝きに比べ、あまりにもゆとりがなく、人生の楽しさを知らず、点数といじめの日常に縛られている日本の子どもたちの憐れな状況が、日常身辺にあふれている事実をゴマ化しようがないのだ。

私はもう一度、子どものせいでなく、日本の大人全体の責任であることを強調したうえで、この子どもたちの人間らしい成長・発達に、地域社会、大人総ぐるみで運動として取り組んでいるボローニャ・サベンナ地区の様子を伝えよう。イタリア経済の活性化をつくり、すべての大人たちが地域社会で手をつなぎ、日常的に心をくだき、身体を動かしている運動の中身として。人間らしく生きるソフト化時代の暮らしの主題が、そこにあるのだ。

一三・四歳児を孤立させない運動

◇――発達の危機・情報化の波にのまれて

その運動をボローニャでは"一三歳・一四歳の子どもたちを社会的に孤独にさせない運動"と呼んでいる。

具体的には、一三歳・一四歳といえば、日本の中学一年・二年にあたり、成長・発達の時期からみても、学校教育の時期からみても、きわめてデリケートな配慮が必要な年代であることは、イタリアでも日本でも変わりないだろう。イタリアでは、日本のようにこの時期で人生の進路が決まってしまうような、成績による深刻な選別・差別体制もないし、偏差値受験体制もない。だが、昔か

らの青春前期の情緒不安に加え、テレビ、コンピュータによる人間連帯の分断現象は同じように猛威をふるい、放置すれば老人はもちろん、子どもたちが仲間・先輩にもまれながら成長・発達する日常生活を奪われる社会的危機に立たされるようになった状況は、変わりないのである。

この子どもたちの成長・発達の危機に挑み、〝情報化〟にともなう弊害をなくし、豊かで楽しい人生を子どもたちに準備するため、二つの具体的な取り組みを、ボローニャ大学の先生、教師たち、保母たち、市職員、親たちなど、地域のあらゆる大人・団体が手を結んで開始したのである。

「テレビやコンピュータ機器が暮らしのなかに入ってきて、大人は忙しく働き、家庭の生活もふれあいが少なくなり、学校でも希望がもてず、非行にはしったり、麻薬におぼれたりということになります。子どもたちをテレビだの、ビデオだの、マイコンだの、自分の心身を使わず、便利で楽な媒体の洪水のなかにほうりこめば、すぐその世界に染まって自分で考えることをせず、行動することをしない子どもができてしまいます。」

ここまで、バロッタさんのいわれたことは、日本でも問題になっていること。だが、この事実を受けとめ、必要な行動をおこす点で違いが生まれるのだ。

◇――情報化機器への正しい取り組み

●二つの運動

「便利なものだと、考えもせず検討もしないで、子どもたちの生活のリズムや成長のハーモニーを壊してしまうような文明の道具を、利潤追求の目的で安易にもちこむのは大人の罪です。機械は人間が使うもので、その逆ではありません。だが、子どもは幼いころから機械の虜になり、成長・発達が妨げられます。だから、人間が豊かに創造的に暮らしていくための道具として使いこなせるように、まず私たち大人が、注意深くデリケートに使い方を検討し、工夫し、それから子どもたちの生活にもちこむことをする必要があるのです。」

サベンナ地区ではこの認識にもとづいて、子どもたちに正しい情報化機器利用の知識を身につけさせるための運動が始まり、同時に、子どもたちに読書の楽しみを体験させる運動も併行させ、全体として子どもたちが社会的に孤独にならず、連帯して成長・発達する二つの運動として結実しつつあるのだ。

●まず大人たちの学習から

大切なことは、まず大人たちの学習から始めたこと。

「私たちはまず、大きなシステムから、家庭に入ってくるゲーム機に到るまで、あらゆる種類のコンピュータ機器を、関係メーカー技術者つきで説明会・講習会を開きました。文化センターやしかるべき場所で、ボローニャ大学の先生方、小・中の先生方、市の職員など、みんながときには生徒になり、ときには講師になって、コンピュータの使い方からはじまってその特性、注意すべきことなどを勉強するのです。もちろん、エレクトロニクスの専門家だけでなく、心理学者、教育学者、医学者など、それぞれの分野から、コンピューターを子どもたちの日常に持ちこむ際の問題点を出していただきます。親たち、地域の大人たちもいっしょに、子どもたちのために学びます」

一年前にこの運動のことを聞き、一年経って訪ねてみて、大へん驚いたことがある。なんと、この情報化機器の使い方について、この年度から小学校一年生のカリキュラムに入れられていたのである。

イタリアという国は、社会運動でも文化運動でも必要と思うことは、まだ討議中であってもどんどん実行し、間違いがあれば翌日でもなおす国と聞いてはいたが、こんなふうに敏速に学校教育にとり入れ、先生・親がいっしょになってテレビ、マイコンの使い方をコントロールしてしまうのだ。

日本でいま、任天堂を筆頭にわずかな期間にファミコン一〇〇〇万台以上を売りあげ、社員にボーナスが四ケタ出たとか、ドラゴン・クエストⅢが五〇〇万本売り切れ、学校を休んで買いに行く小学生が出たとか、まことに無責任に、マスコミも大人たちも話題にする現実と大へんな違いである。

こんなことは、イタリアと日本の文化度の違いとか、情報化のプロセスの違いなどといって済ませることではない。この瞬間にも、傷つき、倒れ、登校拒否・非行・自殺・殺人と、歯止めなく人生から脱落していく子どもたちが増えこそすれ、教育、

子育てが正常化するメドは立っていないのである。それどころか、先日一年ぶりに訪ねた、広島駅前にできた高層受験産業ビルを見上げて、母親がつぶやいた。

「今までの河合塾に、代々木ゼミが正面からなぐりこみかけますから、生徒も親も右往左往しまして……また、戦争も自殺も増える一方で……」

重要なことは、子どもをめぐる状況は、すべて大人の作った社会制度、教育制度、商品の洪水のなかでつくり出されたものである事実。日本の大人たちが意識的につくりだした社会環境が生みだすもので、自然現象ではないのである。

テストも偏差値もテレビやファミコンも、きちんとした準備や対策なしに子どもたちの生活にもちこむならば、子どもを毒し、殺す兇器になる事実の認識から、私たちはきっちりとやり直す必要がある。家庭生活、学校、地域社会、なによりも大企業の商品づくりそのものを検討し、暮らしを自分たちで考え、選択し直す努力が必要である。

高度成長の初期、薬・食品の乱開発に対し婦人たちが起ちあがり、十数年の運動で食品添加物や農薬の乱使用を抑制させる点で成功してきた生活協同組合運動などの経験を生かし、いま心の汚染をつくりだす大企業の精神的機器の乱売をチェックする運動が必要なのである。同じ子どもたちの心の危機に対して、大人たちが思想・信条のちがいをこえ、行動をおこし、子どもの心を守り育てる大運動を始めたイタリアの状況を見すえることが、まず重要であろう。

イタリア中北部では、驚くほど住民自治が発達し、子どもの育つ教育環境が日本よりはるかに整っていても、なおかつ、大人が手をつないで運動をしなければ、新しい情報機器の洪水のなかで、子どもたちの健全な心身の成長・発達を実現できないという事実の重み。便利になるほど人間の心身が退化し、限りなく人類は滅亡に向かうという予言が当たる不幸な状況が、日本では確実に進行しているのである。

●読書の喜びを共有することの大切さ

「ですから、情報化機器を使いこなす力を、子どもたちにつけてもらうだけでは十分ではありません。私たちは同時に、ずっとこうして自分を育ててきたように、自分の頭脳と心で本を読みこなす力をつけることも、運動として取り組むことが必要です」

バロッタさんは、そういって具体的に、一〇〇〇冊の本を子どもたちに親しませる運動をサベンナ地区で展開している事実を語った。これも出版社に本を届けてもらい、前述した地域のあらゆる専門家諸団体、そして大人たちが力を寄せあい、本の魅力を親にも子にも体験させる展示会・集いを、地域で徹底的に行なうのである。

ここでもまず、大人たちの勉強から始まる点に注目しよう。

「若い母親たち自身が、テレビや視聴覚媒体に慣らされて本を読むことをしなくなっている傾向は、日本と同じだと思います。だから、まず子どもたちが一日のうち、二〇分でも三〇分でも本を読む時間、つまり一人になり、文章を読み、自分の心をはたらかせ、過去や未来の生活を自由に想像できる、そんな時間を一日のうちに必ずもつことの楽しさを発見するよう、大人もいっしょに行動することです」

私は、情報化機器への正しい対応とともに、その弊害として、子どもが読書しなくなるという現象がみられると、大人たちが合意しあい、読書推進の運動を発展させている現実に、驚きをこえ心がふるえる感動をおぼえた。日本でも、いま子どもがテスト用文章以外は、マンガ・テレビ・ファミコンとなり、本を読めなくなっているのが教師・親の深刻な悩みになっているが、受験のための〝必要悪〟という次元にとどまり、事態はいっそう深刻になっていく。

ボローニャでは、大人がネットワークをつくり、直接、地区単位で子どもたちが本に親しむための働きかけを行なうのである。

「本の展示場の横では、俳優さんたちにすぐれた作品を子どもたちに読みきかせる集いを開きます。ここでも、母親たちにまわりで聞いてもらうことが重要です。つまり、読書の楽しさを知らない状況は、テレビの悪い影響で育った若い母親たちのなかにありますから。まず、大人が心をこめていい物語を読んであげれば、子どもがどんなに生き生きと反応し変わるかを、お母さん自身が体験することです。スキンシップの必要も、読みきかせの必要も、子どもの人間的成長にとって、人間どうしのふれ

あい、交流がいかに大切かを示しているのです。意味の伝達だけならテレビでできるでしょうが、人間の心が育つには人間どうしのふれあい、そして自立が、いつだっていっそう必要なんです。テレビ、コンピュータの世界で育つ子どもには、それが必要なのです。機械に頼るとふれあいも自立もなくなってしまうのが恐ろしいのです」

このサベンナ地区の学校区単位で、顔の見える地域の読書推進運動を進めた成果を、バロッタさんはこう表現した。

「今年（八六年）の一月から三月まで運動した結果、この地区の子どもたち三八五人が、新しく少年少女センターの図書室の会員として登録しました。つまり、本を借りてでも読もうと思うようになった子どもたちが、この地区だけでこれだけ生まれたということです」

子育て大運動

◇――なぜ子育ては第二のルネッサンスの軸か

私が、この最初のイタリア報告のしめくくりに、サベンナ地区における地域社会、大人たち総がかりの〝子育て大運動〟報告をもってきたのには、二つの理由がある。

一つは、日本であれイタリアであれ、高度に文明が発達し、〝情報化社会〟づくりに突入している国では、一人ひとりの大人・子どもにとって、物質的分配が限りなく平等・公平に近づきつつあるかどうかとともに、人間存在として限りなく自由に表現し、人間性豊かに成長・発達できるかどうかが、その国に生きる満足度・幸福度のメルクマールになるということ。その点からみて、日本では人類史上初めて商品として登場してきた最新の表現情報媒体、テレビ、コンピュータなどを、子どもたちの成長・発達にどうかかわるかを検討せず、教育を産業化し、競争法則にゆだねることとあわせ、商品競争法則にまかせて野放しにしていること。子どもの心身の荒廃をすすめる大きな役割を果たしていること。世界に例をみない、一五歳以下の学校、教育にかかわる自殺者の数、貧困を理由とする以外の、高校・中学中途退学者の数、登校拒否児の数をあげるだけで、そのことを問題にする理由は十分であろう。

その点で、イタリアではキリスト教民主党支持者も、共産党支持者も手をつないで、子どもたちが人間らしく成長できる社会環境づくりに最も大きい連帯行動を行なっている事実をとりあげたのである。

つまり、二〇世紀末の最大の課題の一つは、すべての子どもたちが、親の思想信条の違い、経済的貧富の差に関係なく、人間らしく自由に成長・発達できる地域社会、国家を実現する点にあるのだ。

二つ目は、権力者・資本家による支配・管理が、競争・利潤法則の貫徹の形でテレビ、コンピュータなどにより、人間成長・発達にとってのタブーである、子どもたちの心の世界にまで及んだことにより、人びとが人間らしく成長し、自由に豊かに生きることのために〝第二のルネッサンス〟と呼ばれる、地域から生活のなかから人びとが手をつなぎ暮らしをつくりかえる運動が、いま進行していることを伝えたかったということ。新しい下からの民衆による暮らしづくり・文化づくりの時代であり、民族の自治、文字どおり住民による自治のうねりが、国境をこえ、世界の流れになりつつある。その意味で、まさに〝第二のルネッサンス〟の時代と呼ぶにふさわしい時といえるのだ。

◇――共通する生活の場の連帯・協同の動き

この観点から、イタリア探訪の動機である私たち日本におけるGNPに見合わない大多数国民の暮らしの貧しさ状況を見直すならば、状況やプロセスの違いはあっても、暮らしのあり方を権力や資本の支配にまかせず、生活の現場から一人ひとり手をつなぎ、創りかえる行動を起こし、次第にその連帯・協同のネットワークが各地各現場で形成されつつある共通した現象を見ることができる。

「座談会・いま〝豊かさ〟とは」（本誌三月上旬号）のなかでもとりあげたが、高度経済成長に限界が見え、社会的矛盾がふきだしはじめた七〇年代前半ころから、その矛盾から生活を守る運動としておこり発展してきた学童保育運動、生活協同組合運動、子ども劇場運動は、イタリアで進行している子育て・環境づくり・文化づくりを軸とするルネッサ

ンス運動の中身と、共通する要素を多くもっているといえる。

高度経済成長がもたらした有害な結果、新しい〝貧困〟現象である〝親子がともに顔を合わせ、安全・安心な食卓をかこみ、楽しく豊かな文化にふれる暮らし〟がもてなくなった現実への闘い――それぞれの運動が、日本各地でそれぞれに成長し、重なりあい、従来の労働組合運動、教育運動、婦人運動、文化運動などと結び、いま日本の歴史にかつてなかった下からの生活づくり・連帯づくりが進行しているという見方を、私たちはまず確認する必要がある。

つまり、一つひとつの運動をみていると、共働きの親の子が育つ条件をかちとることであったり、有害な添加物を食物から取り除くことであったり、テレビだけでない生の芸術にふれさせることであったり、それぞれの子育て条件をかちとる親の運動ということができる。

だが、それらをつなぎ、従来からあった地域社会での保育・教育・医療をよくする運動と重ねあわせるならば、それはもはや、一つひとつの条件闘争、抵抗闘争の域をこえ、高度経済成長から高度情報化社会へと進む日本資本主義社会の人づくり・文化づくりの貧困にたちむかい、人間の成長・発達を実現する真に民主的で豊かな人づくり・生活づくり・文化づくりの運動に発展しつつあるといえるのだ。

◇――大学生協の読書推進運動の取り組み

また、イタリアにおける〝子どもたちを社会的に孤独にさせない運動〟をみて、日本でも八〇年代に入って全国の大学生協が各大学キャンパスで、読書推進運動をはじめ広がっている現実を思った。

この運動を推進する教職員の一人、宮腰東京学芸大教授の話からも、いま教育水準も世界のトップと胸をはる大学キャンパスに、読書のできないエリート学生が増えつつある驚くべき現実を知らされた。太宰治の『女学生』を辞書片手に一週間かかってやっと読み、意味のつかめない教師志望の大学生がいたり、受験用書籍を学校・塾などで手に入れる結果、高校卒業まで本屋に足を踏み入れたことのない若者がいるといった、信じられないほど非文化的あるいは欠陥人間ともいうべき受験エリート学生が、ほうっておけばますます増えていくということなのだ。

イタリアでは、情報化機器を使いこなす人間づくりを、地域社会の大人総がかりで、一三歳、一四歳の子どもたちから始めたのだが、日本ではいま、大学生が本を読む歓びを体験し共有する運動として始まったということ。大学生になって、暗記能力とコンピュータ操作能力が優秀でも、読書の楽しみを知らず、文章が書けず、人と語りあえないのでは生活無能力人間になってしまう危険に気づき、手塚治虫の『火の鳥』や池田理代子の『ベルサイユのばら』など、内容あるコミックから読書をはじめる運動が、静かに広く、いま大学キャンパスで進められているのである。

一言だけ申しあげておけば、この日本人の精神生活の危機進行状況のなかから、一方ではその現実に挑み、〝競争〟でなく〝連帯・協同〟の行動を各大学キャンパスで進めることによって、かつてなかった大学の自治、生活文化づくりが、いま実現しつつある事実を見る必要がある。

たとえば昨年、マスコミもとりあげた、名古屋大学での飯島学長の一票もふくめ、教職員、学生の一人一票の意志表示によって、名古屋大学に生活する者の意志として実現できた〝名古屋大学平和憲章制定運動〟の成功がある。その内容は、〝ヒロシマ・ナガサキの現実を体験した、日本の大学に学び研究する者として、戦争をすすめる学問・研究に協力することをしない〟という、まさに日本の大学の歴史になかった一人ひとりの大学人の意志で自治と自由と平和を守り創るという、限りなく人間的な選択を実現することができたのだ。

◇――地域社会にひろがるネットワークの芽

地域社会に眼を転じれば、さまざまな連帯・協同の暮らしづくり・町づくりの萌芽が見られる。名大のある東海地域で、消費生協・医療生協、自治体職員、教師、障害者団体、文化団体、労働組合などで、新しい地域協同・町づくりのネットワークが育ちはじめ、神奈川では消費生協、農協、自治体職員、建築業者、作業所、民商、婦人団体など、県下各地一二〇万人が参加する協同組合まつ

りを成功させる地域ネットワークが根をはり、住宅建設や地域産直など、住民自身の生産協同活動が自主的に形をなしはじめている。

また、生産協同・仕事おこしの面では、アメリカ型大量生産・大量消費型文化状況が生みだしてきた“労働者、技術者切り捨て”“文化の質低下”の現実に挑み、全日自労を軸とする中高年事業団活動の前進、さらに音楽家ユニオン、出版労連、児童演劇協など、文化を創りだす労働者、技術者によるよりよい仕事づくりのための協同組合化の動きも形をなしはじめている。また、従来の革新自治が深まっている吹田、川崎、日野、中野などでは、子育て、高齢化対策、障害者対策など保守政治のアキレス腱に切りこみ、住民による生活づくり・文化づくりが地域的に成果を形にしつつある。

そして、日米の政治・経済のしくみがつくりだす矛盾をめぐり、従来は考えられなかった住民諸階層の連帯、生活のネットワークづくりの状況を発見できる。核戦略による米軍基地の拡張をめぐり、東京都三宅島、神奈川県逗子では、保守革新の違いをこえ、女性を軸に建設に反対する住民の、生活のなかからの連帯行動がねばり強くつづけられている。アメリカの圧力のもと、牛肉・オレンジから米までも輸入自由化の嵐にさらされつつあるいま、従来、保守政治の基盤なっていた農協と消費生協が連帯し、日本の暮らしと農業自立、農村防衛の運動として宮城、北海道、神奈川など各地で行動が起こりつつある。

日本は、イタリアよりはるかに大きいアメリカの政治・経済の影響下にあり、食生活まで変質させられてきた。大量生産・大量消費文化のもとで、この四二年を生きてきた。とりわけ、高度経済成長以来顕著になってきた、利潤・競争・効率優先の人間生活荒廃は、家庭破壊、子どもの成長発達障害を生む段階にまで到達し、いまやっと、その生活破壊、連帯破壊状況にたちむかい、人間らしい家庭生活・地域生活を守り育てる協同・連帯のネットワークが育ちはじめたのである。行動ははじまったばかりであり、成果はまだささやかである。その点で、一九世紀以来、レジスタンスの時期を経て、一貫して人権を育て、自らの文化をもつ努力を積み重ねてきたイタリアの経験を学び、吸収することが必要である。

しかし、私たちはGNP一位の生産力をつくりだしたほどの大へんな働き者の国民であることに確信をもち、いま、この働きにふさわしい、時間を豊かに使い、人間どうし楽しく自由に暮らす、つまり、競争差別でなく、協同・連帯の生活を自らの手でつくり出すことを実行する時期を迎えているのである。

時間を豊かに、自由に楽しく平和に生活することは、世界諸国民が共通にめざす二一世紀の暮らしであり、イタリアをはじめ、西ヨーロッパ諸国、そして日本をつなぐ、高度に発達した資本主義諸国における当面の生活変革の目標なのだ。

●イタリア「第二のルネッサンス」の現場訪問記／掲載号

①生活の“豊かさ”とは何か　一一八三・四号
②時間を豊かに使う生活　一一八五号
③住民による自治・文化・子育て　一一八七号

労旬新書　組合員必携

内山光雄著 **労働運動入門** 450円
中林賢二郎著 **労働組合入門** 450円
戸木田嘉久著 **合理化問題入門** 350円
角瀬保雄著 **経営分析入門** 500円
高木督夫著 **新版・賃金入門** 500円
黒川俊雄著 **新版・最低賃金制入門** 400円
小島健司著 **賃金問題入門** 450円
青木宗也著 **労働基準法入門** 500円
窪田隼人著 **就業規則入門** 450円
片岡昇著 **労働協約入門** 400円
中山和久著 **公務員法入門** 450円
中山和久著 **公労法入門** 450円
吉田秀夫著 **社会保障入門** 450円